

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-1)・2)・3)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して発信するため、文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。 1)文化財に関するデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。 2)被災文化財関連情報に関するデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。 3)文化財に関係する図書、雑誌等の収集、整理、公開、提供を充実する。
プロジェクト名称	専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充	
文化財情報資料部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○津田徹英（同文化財アーカイブズ研究室長）、安永拓世（研究員）、橘川英規（研究員）	
【年度実績と成果】		
○全所的文化財情報を発信するため4半期ごとにアーカイブズWG協議会を開催した（4月21日、9月29日、12月20日、29年3月2日）。 ○資料閲覧室のレファレンス機能の拡充 ・音声視聴覚ブースを設置し、公開に向けて当研究所無形文化遺産部が所蔵する音声映像資料の資料閲覧室での視聴に対応するよう環境を整えとともに、『音盤目録』をWeb上での公開と活用を見据えてデジタル化を行った。 ・刊行物アーカイブズシステムの運用評価を行い、成果公開のコンテンツとして、海外発信を念頭に置いて英文のともなう『在外日本古美術品保存修復事業 報告書』の公開のため担当部署との協議を行い（6月27日）、直近5年間の報告書のWeb上での公開を行うべく、掲載作品を収蔵する海外の美術館・博物館に対して公開に関する許諾申請を行った。 ○明治・大正期刊行の雑誌類等資料のデジタル化推進 ・当研究所所蔵の『売立目録』について、収載内容が画像ともども検索できるシステム改良を行い、併行して収載内容のデータ入力を進めた。 ・当研究所の所蔵する近現代の美術作品カード（絵葉書資料）のデジタル化を進めた。 ○無形文化遺産部と連携し、東日本大震災によって被災した地域の無形文化遺産等について復興・支援情報の記録を検索・閲覧できるデータベースとして「無形文化遺産アーカイブズ」の更新を適宜進めた。 ○資料閲覧室の運営・管理 ・資料受け入れ数：和漢書 9,879 件、洋書 53 件、展覧会図録・報告書等 1,302 件、雑誌 29,985 件（合計 41,219 件） ・閲覧室利用状況：公開日総数 137 日・年間利用者合計 923 人		



図書閲覧室窓口



図書閲覧室窓口

年度計画評価	A
--------	---

【評定理由】

下記各観点から評価を行った。①適時性においては、研究所の活動と研究成果を広く周知するために、オープンアクセスのみならずオープンサイエンス対応のため研究所として保存すべき情報・資料について暫定的な指針を定めた。②独創性においては、当研究所が有する独自性の高い文化財情報の公開を念頭におき『売立目録』を、また、英文を併載して海外からも情報に接しやすい『在外日本古美術品保存修復事業 報告書』について、直近5年間分のWeb上での公開を目指してデータベース化を進めた。③発展性においては、研究所のもつ文化財情報を広く発信し、かつ、海外の研究機関のサイトからの情報アクセスに際して研究所のサイトに誘導することで、研究所の有する文化財に関する専門的アーカイブに直接的に接する機会を増やした。④継続性においては、当研究所が有する情報・画像資料のデジタル化を継続的に行った。あわせて、研究者から一般に至るまで、その関心の程度に応じて情報の提供が可能となるよう目指した。また、資料閲覧室としての公共性とその特性に沿った運営を行い、週3回、一般利用者への所蔵資料の提供を行った。⑤定量的評価の観点においては、目標値を上回り達成率が120%以上となった。よって順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	A	B	A	B	

【目標値】	【実績値・参考値】	⑤定量評価
・文化財に関するデータベースの公開件数18件	(実績値)文化財に関するデータベースの公開件数22件、(参考値)データベースのデータ件数1,164,416件、データベース等へのアクセス件数:1,591,403件、資料閲覧室の開室日数137日、利用者数923人、文化財に関する資料・図等の総件数309,620件、論文等1件 (①)、学会・研究発表1件(②)	A

①橘川英規「閉架書庫に発生したカビ対策事例」(『保存科学』56号、29年3月)

②橘川英規「図書館に発生したカビとその防除対策事例」(第36回文化財防虫防菌処理実務講習会、10月14日)

中期計画評価	B
--------	---

中期計画記載事項	文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。なお、文化財に関するデータベースの公開件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由及び今後の見通し	今中期計画期間の初年度にあたる28年度は、閲覧室のレファレンス機能を無形文化財の音声・映像視聴に及ぶことを見据え環境整備に着手するとともに、海外発信を念頭に置き研究所の成果刊行物のなかから英文をともなう在外修復の報告書を選定し、掲載作品を収蔵する海外の美術館に公開の許諾申請を進めた。29年度以降も当所の調査研究と成果を集約し、データベースの継続的拡充を行うことで、専門的アーカイブと総合的レファレンス双方の充実が見込まれる。

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-①-1)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して発信するため、文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。1)文化財に関するデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。
プロジェクト名称	文化財に関するデータベースの充実	
企画調整部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○森本晋（部長） 高田祐一（文化財情報研究室研究員）	

【年度実績と成果】

- 文化財情報電子化の研究を行い、GIS（地理情報システム）を活用した遺跡情報の分析に関する研究発表2件と全国遺跡報告総覧に関する研究発表5件（うち3件は口頭発表）を行った。
- 文化財情報データベースの充実として、従来より進めている遺跡、写真、報告書抄録、航空写真、図面画像、考古関連雑誌論文情報補完の各データベースに関して、データの入力・更新を行うとともに、公開データベースの更新を行った。
- 新規データベースとして「報告書内論考データベース」を公開した。



シンポジウムでの討論

- データベースのデータ件数は28年度末で以下のとおり、順調に増加している。ただし（ ）内は27年度末の値。（単位：件）
全文 213,810(213,772)、木簡 166,231(164,282)、抄録 96,474(91,042)、
写真 640,855(575,087)、遺跡 480,794(480,021)、航空写真 1,386,456
(1,381,527)、図面画像 316,990(263,444)、論文補完 91,694(88,075)。
- 埋蔵文化財の発掘調査報告書全文検索データベース「全国遺跡報告総覧」に関して、島根大学での協議（計5回）、関係機関との打ち合わせ（個別協議計10回、全体協議1回）を行ったほか、シンポジウム（写真）を11月28日に奈文研で開催し、60名の参加を得た。

年度計画評価	A				
【評定理由】 下記各観点から評価を行った。①適時性においては、データベースの充実において、最新のデータを提供している。特に全国遺跡報告総覧には社会的関心も高く、今求められているデータを積極的に発信できている。②独創性においては、他機関では提供されていない内容をデータベースで公開している。③発展性においては、現存のデータベースではカバーできなかった発掘調査報告書に掲載される論考について新たに「報告書内論考データベース」を追加したことは、内容の充実のみならず需要を反映し多様化を図ったことでも評価できる。④継続性においては、数十万件規模のデータベースを複数維持し、データの入力・更新作業は長年に渡って継続しており、今後も続ける予定である。⑤定量的評価の観点については、現存のデータベースの継続に加え、新規に追加したことでB評価となった。以上から、本事業は当初計画以上に順調かつ発展的に推移している。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	A	B	A	A	
【目標値】 ・文化財に関するデータベースの公開件数 22 件	【実績値・参考値】 (実績値) 公開データベースの数 25 件 (参考値) データベースのデータ件数 1,341,997 件 データベース等へのアクセス件数 4,206,991 件 論文等数・研究発表等数 7 件 (①②③) 全国遺跡報告総覧データ数 18,838 件 アクセス件数 2,033,826 件				⑤定量評価
					B
①高田祐一「発掘調査報告書のデジタルアーカイブ」『奈良文化財研究所紀要 2016』6 月 24 日 ②森本晋ほか「GML による遺構情報モデルの符号化の試み」『地理情報システム学会第 25 回学術研究発表大会』10 月 15 日 ③高田祐一「『全国遺跡報告総覧』プロジェクトの状況 発掘調査報告書のデジタルアーカイブの実現に向けて」『遺跡学研究 13』11 月 17 日ほか 4 件					

中期計画評価	A	
中期計画記載事項	文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。なお、文化財に関するデータベースの公開件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。	
評定理由及び今後の見通し	文化財情報に関する基礎研究を積み重ねながら、継続性が重視されるデータベースの充実を着実に進めており、それが新規のデータベース公開につながっている。他機関と協力して進める大規模データベースである全国遺跡報告総覧は中期目標を超える成果を上げつつ、今後の発展が大いに期待される。	

中期計画の項目	2-(4)-①	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用																				
年度計画の項目	2-(4)-①-3)	①文化財情報基盤の整備・充実 文化財関係の情報を収集して発信するため、文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関する専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。3)文化財に関係する図書、雑誌等の収集、整理、公開、提供を充実する。																				
プロジェクト名称	図書の収集・整理・公開・提供																					
研究支援推進部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○津田保行（連携推進課長）、渡 勝弥（課長補佐）伊藤久美（事務補佐員）																					
【年度実績と成果】																						
・資料の収集・整理・保管・提供 購入及び寄贈により発掘調査報告書を始めたとした歴史的建造物の修理報告書等歴史・考古学分野を中心とする資料の収集を行い、目録の整備を行った。また、資料の情報をデータ化し、データベースに蓄積してインターネット上で公開した。書架及びステップ等を補充し、提供スペースを拡充した。																						
・利用者サービス 閲覧室において一般利用者に資料を閲覧提供すると共に、遠隔地からの図書利用については、国立情報学研究所が行っている NACSIS-ILL 及び公共図書館を通じて文献複写・現物貸借サービスを行った。																						
<table><tr><td>購入図書</td><td>1,117 冊</td></tr><tr><td>寄贈図書</td><td>8,572 冊</td></tr><tr><td>雑誌</td><td>1,254 タイトル</td></tr><tr><td colspan="2"> </td></tr><tr><td>一般利用者数</td><td>475 人</td></tr><tr><td>利用冊数</td><td>4,027 冊</td></tr><tr><td>来館者複写件数</td><td>1,918 件</td></tr><tr><td colspan="2"> </td></tr><tr><td>遠隔利用：複写受付件数</td><td>538 件</td></tr><tr><td>貸借貸出冊数</td><td>94 冊</td></tr></table>			購入図書	1,117 冊	寄贈図書	8,572 冊	雑誌	1,254 タイトル			一般利用者数	475 人	利用冊数	4,027 冊	来館者複写件数	1,918 件			遠隔利用：複写受付件数	538 件	貸借貸出冊数	94 冊
購入図書	1,117 冊																					
寄贈図書	8,572 冊																					
雑誌	1,254 タイトル																					
一般利用者数	475 人																					
利用冊数	4,027 冊																					
来館者複写件数	1,918 件																					
遠隔利用：複写受付件数	538 件																					
貸借貸出冊数	94 冊																					
																						
空きスペースに配置した書架																						

年度計画評価		B			
【評定理由】 下記各観点から評価を行った。①適時性において、利用者が求める資料を収集し、適切な整理と配架をすることにより、利用冊数が増加した。②発展性において、全国遺跡報告総覧の基礎データとなる資料を集中的に登録し、ネット配信等に活かした。③効率性において、仮設庁舎という限られた書庫スペースでありながら書架及びステップ等を補充することにより、狭隘の緩和、資料配架の効率性の向上を行った。④継続性において、従来からの目録規則に則った整理を行うことにより、各資料の適切な整理と保管を行い、資料やデータの登録も継続的にを行った。以上から事業は順調に推移している。					
観点	①適時性	②発展性	③効率性	④継続性	
定性評価	B	B	A	B	
【目標値】	(実績値・参考値)				定量評価
	(参考値) 資料閲覧室・図書資料室の開室日数 243 日				—
	資料閲覧室・図書資料室の利用者数 475 人				
	文化財に関する資料・図書等の総件数 454,898 件				

中期計画評価	B	
中期計画記載事項	文化財情報の計画的収集、整理、保管、公開並びにそれらの電子化の推進による文化財に関するアーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを充実させる。	
評定理由及び今後の見通し	現在、仮庁舎ということもあり、書庫がかなり狭隘な状況になりつつある中、30 年度の新庁舎への書庫移転を見据えた資料管理を検討し、スペースの有効活用を行うことにより、新着資料の受入に努力を続けた。 データの登録及び利用者サービスを低下させることなく継続出来た。	

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-1)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多元的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを充実させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 1) 定期刊行物の刊行 ・『東京文化財研究所年報』 ・『東京文化財研究所概要』 ・『東文研ニュース』 ・『美術研究』（年3冊） ・『日本美術年鑑』 ・『無形文化遺産研究報告』 ・『無形民俗文化財研究協議会報告書』 ・『保存科学』
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行	
東京文化財研究所	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○所長 亀井 伸雄	
【年度実績と成果】		
・『東京文化財研究所年報』 2015 年度版 ・『東京文化財研究所概要』 2016 年度版 ・『東文研ニュース』 年3回（61～63号） ・『美術研究』（419号）（6月） ・『美術研究』（420号）（12月） ・『美術研究』（421号）（29年3月） ・『平成27年版 日本美術年鑑』（29年3月） ・『無形文化遺産研究報告』第11号（29年3月） ・『第11回無形民俗文化財研究協議会報告書』（29年3月） ・『保存科学』56号（29年3月）		
その他、エントランスロビーでのパネル展示及び関連の小冊子（29年3月）		

年度計画評価		B			
【評定理由】					
下記各観点から評価を行なった。①適時性においては、『保存科学』56号は28年度から全ての原稿について口絵カラーも含むpdfファイルを作成し当研究所のウェブサイトから自由にダウンロードできるようにするなど、この分野に関心を持つあらゆる人々に最新の文化財調査研究に関わる知見を載せて作成することができた。②発展性においては、『美術研究』掲載の津田徹英論文で中世の絵巻を詞書から捉え直し、集成する試みを提唱した点が評価される。③効率性においては、『日本美術年鑑』の編集作業で刊行物アーカイブシステムを本格的に導入した点が評価される。④継続性においては、『美術研究』は昭和7年以来、『日本美術年鑑』は昭和11年以来続けてきた刊行を、28年度も絶やさず実現できた点が評価される。⑤定量的評価の観点においては、所期の予定どおり、28年度も文化財に関する調査研究の成果に関する刊行物を刊行することができた。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。					
観点	①適時性	②発展性	③効率性	④継続性	
定性評価	B	B	B	B	
【目標値】 ・定期刊行物等の 刊行件数 12点	【実績値・参考値】 (実績値) 定期刊行物等の刊行件数 12点(以下のとおり) 『東京文化財研究所年報』2015年度版 刊行部数 500部 『東京文化財研究所概要』2016年度版 刊行部数 2,700部 『東文研ニュース』61～63号 刊行部数各 1,600部 『平成27年版 日本美術年鑑』刊行部数・配布部数各 600部 『美術研究』419号～421号 刊行部数各 400部、・配布部数各 380部 『無形文化遺産研究報告』第11号 発行部数 600部 『第11回無形民俗文化財研究協議会報告書』 発行部数 700部 『保存科学』56号 発行部数 650部				⑤定量評 価
					B

中期計画評価	B
中期計画記載事項	文化財に関する調査研究の成果を定期刊行物や公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。なお、定期刊行物等の刊行件数及び講演会等の開催回数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由及び今後の見通し	中期計画どおり定期刊行物の作成を順調に実施することができた。また、各研究プロジェクトの総括的な研究成果を多く公表することができた。 29年度も、引き続き、学術誌としての一定の水準を保ちながら刊行する計画である。

【書式C】	施設名	奈良文化財研究所	処理番号	2421F
-------	-----	----------	------	-------

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-1)・2)・3)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトのを充実させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。1) 定期刊行物の刊行・『奈良文化財研究所紀要』・『奈良文化財研究所概要』・『奈文研ニュース』・『埋蔵文化財ニュース』、2) 公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等・公開講演会・現地説明会、3) ウェブサイトの充実・学術情報リポジトリ・なぶんけんブログ（探検！奈文研、コラム作寶樓等）
プロジェクト名称	定期刊行物の刊行、公開講演会・現地説明会等の開催、ウェブサイトの充実	
研究支援推進部 企画調整部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○津田保行（連携推進課長）、渡 勝弥（連携推進課課長補佐）梶原孝次（連携推進課課長補佐）、ほか	

【年度実績と成果】

1) 定期刊行物の刊行

- ・奈良文化財研究所紀要 2016 刊行（6 月 30 日）・奈良文化財研究所概要 2016 刊行（7 月 29 日）
- ・奈文研ニュース「No. 61」6 月刊、「No. 62」9 月刊、「No. 63」12 月刊、「No. 64」29 年 3 月刊
- ・埋蔵文化財ニュース「No. 166—年輪年代学的手法を用いた木製品の同一材検討-平城京出土斎串の整理作業を通じて-」10 月刊
- 「No. 167—保存科学研究集会文化財調査におけるイメージング技術の諸問題」3 月 29 日刊
- 「No. 168—平成 28 年(2016 年)熊本地震装飾古墳等被災状況速報」3 月 30 日刊
- 「No. 169—2015 年度埋蔵文化財関係統計資料」29 年 3 月 31 日刊

2) 公開講演会

- ① 「プラネタリウムで考古学」の「星空とキトラ古墳のナゾにせまる」（5 月 21 日）他で講演 於多摩六都科学館（東京都）175 名
- ② 第 118 回公開講演会（6 月 18 日）：202 名 ③「英国発！グローバル考古学」（9 月 3 日）：65 名
- ④ 第 119 回公開講演会（11 月 5 日）：234 名 ⑤第 8 回東京講演会「飛鳥むかしむかし」（11 月 13 日）：447 名
- ⑥ 飛鳥資料館春期特別展記念講演会「飛鳥の文化財を撮る眼」（5 月 28 日）：36 名
- ⑦ 飛鳥資料館秋期特別展記念講演会「祈りをこめた小塔」（11 月 26 日）：46 名

3) 現地説明会

- ① 藤原京右京九条二・三坊の発掘調査（飛鳥藤原第 187 次）現地見学会（5 月 15 日） 於橿原市城殿町発掘調査現場（ポリテクセンター奈良敷地内）：1,753 名
- ② 平城京二条大路・朱雀大路跡の発掘調査(平城第 566 次調査)現地見学会（6 月 11 日） 於二条大路南 4 丁目発掘調査現場：505 名
- ③ 藤原宮朝堂院朝庭の発掘調査（飛鳥藤原第 189 次調査）現地見学会（10 月 2 日） 於橿原市高殿町発掘調査現場：1,315 名
- ④ 東大寺東塔院跡発掘現場説明会（10 月 8 日）於東大寺東塔院跡発掘現場：1,125 名
- ⑤ 藤原宮大極殿院の発掘調査（飛鳥藤原第 190 次調査）現地説明会（29 年 1 月 28 日）於橿原市高殿町発掘調査現場：497 名

4) シンポジウム

- ① 文化的景観研究集会（第 8 回）（7 月 30 日-31 日）：105 名
- ② シンポジウム「シリア内戦と文化遺産—世界遺産パルミラ遺跡の現状と復興に向けた国際支援—」（11 月 23 日）：220 名
- ③ 全国遺跡報告総覧シンポジウム（11 月 28 日）：60 名
- ④第 20 回古代官衙・集落研究集会「郡庁域の空間構成」（12 月 9 日-10 日）：138 名
- ⑤28 年度 遺跡整備・活用研究集会（12 月 16 日）：77 名 ⑥第 17 回古代瓦研究会シンポジウム（29 年 2 月 4 日－5 日）：219 名
- ⑦保存科学研究集会 2016「文化財調査におけるイメージング技術の諸問題」（29 年 3 月 3 日）：95 名

5) ウェブサイトの充実

- ・ブログ①探検！奈文研 週 1 回更新 N0131(4 月 7 日)-163(3 月 30 日) ②コラム作寶樓等 月 2 回更新（全 23 回）
- ・全国遺跡報告総覧等によるウェブサイトにおける発掘調査報告書等の公開件数：18,838 件
- ・当研究所 H P アクセス件数 4,990,661 件(全国遺跡報告総覧等の各種 D B のアクセス数を含む)
- ・新規に「報告書内論考データベース」を公開した。 ・学術情報リポジトリにおいて、随時最新情報を登録・更新した。
- ・木簡画像データベースにおいて、英中韓のページの登録件数を増やし、内容を充実させた。

年度計画評価	A			
【評定理由】 下記各観点から評価を行った。①適時性においては、調査研究の成果を適時に刊行するとともに、現地説明会開催、ウェブ公開いずれにおいても即時的に情報を発信した。②独創性において、当研究所の調査・研究内容の新規性及び卓越性を持たせ発信することができた。③発展性においては、個々のデータベース登録数も増え、新たなデータベースも公開するとともに、多様なブログ、コラム等を更新することによりHPの内容を一層充実させた。④継続性においては、定期刊行物、講演会、ウェブ公開いずれにおいても従来から継続的に実施している上、データベースは随時、データを増加しており、アクセス数も上昇しているため、恒久的な提供と利用が認められる。特に公開2年目となる全国遺跡報告総覧は、全国の考古学研究者からの問合せがあり、アクセス数も大幅な伸びを見せているため、十分に成果を残したと言える。⑤定量的評価の観点について、刊行数においては目標通りに実施することができ、公開講演会等においては目標を190%と大きく上回る回数を実施することができた。東京講演会では藤原宮朝堂院朝廷の幢幡遺構等の調査成果を多様に公開し盛況を得た。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。				
観 点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性
定性評価	B	B	A	A
【目標値】 (1) 定期刊行物等の刊行件数 10 点 (2) 公開講演会、現地説明会の開催回数 10 回		【実績値・参考値】 (実績値) (1) 定期刊行物等の刊行件数 10 点 (2) 公開講演会、現地説明会の開催回数 19 回 (参考値) 講演会等（公開講演会、現地説明会）の来場者数 7,314 人 学術情報リポジトリ等によるウェブサイトにおける論文等の公開件数 4,389 件		⑤定量評価 (1) B (2) S

中期計画評価	A	
中期計画記載事項	文化財に関する調査研究の成果を定期刊行物や公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。	
評定理由及び今後の見通し	28 年度は目標を上回って公開講演会や現地説明会等を実施し、藤原宮朝堂院朝廷の幢幡遺構等の調査成果を多様に発信している。また、データベースの充実やコラムの更新によるウェブサイトのアクセス数が増加している。なお、全国遺跡報告総覧は安定稼働と確実なデータの蓄積を行っており、利用率は更なる上昇が見込まれる。 今後も公開講演会、現地説明会、ウェブサイトの充実等を通じて調査研究の成果をさらに発信していきたい。	

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-2)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを実施させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。 2)公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等 ・公開講座（オープンレクチャー）
プロジェクト名称	平成 28 年度オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）	
文化財情報資料部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○小林達朗（日本東洋美術史研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、小林公治（広領域研究室長）	
【年度実績と成果】 ○11 月 4 日（金）～5 日（土）、ひろく一般から聴講を募集し、オープンレクチャー「かたちからの道、かたちへの道」を開催した。（東京文化財研究所セミナー室）		
テーマは以下のとおりである。 ・橘川英規（文化財情報資料部研究員「ドキュメンテーション活動とアーカイブズ『日本美術年鑑』をめぐる資料群とその発信について」 ・増渕鏡子（福島県立美術館学芸員）「よみがえるオオカミ―飯館村山津見神社・天井絵の復元をめぐる」 ・佐野千絵（文化財情報資料部長）「かたちを伝える技術―展覧会の裏側へようこそ」 ・岡田健（保存科学研究センター長）「記憶するかたち、見つけるかたち―文化財の意味と価値」		
外部からの聴講者は、11 月 4 日には 78 名、5 日には 81 名を得た。		

オープンレクチャーの様子



オープンレクチャーの様子

年度計画評価	B
--------	---

【評定理由】					
下記各観点から評価を行った。①適時性においては、目標値として会場定員にほぼ近い両日あわせて 159 名の一般参加者を見た。参加者にアンケートを行い、11 月 4 日の 60 名の回答者数のうち、「大変満足した」と「おおむね満足だった」を合わせ 80%、11 月 5 日の 75 名の回答者のうち「大変満足した」と「おおむね満足だった」を合わせ 85.4%の回答を得ることができた。②独創性においては、「かたちからの道、かたちへの道」という大テーマを据え、有形文化財から受ける価値観とその表現や伝承へ向かう意志など、すべての文化活動と文化財保護活動を結びつけることができた。③発展性においては、有形文化財伝承の意味・価値、伝える活動、ドキュメンテーション活動など、多岐にわたる側面から研究成果を一般に公開できた。④継続性においては、「古典の日」に合わせて、台東区との協力を欠かさずに続けて開催している。⑤定量的評価の観点においては、年 1 回開催の目標を達成し、アンケートにより参加者の高い満足度を得た。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。					
観点	①適時性	②独創性	③発展性	④継続性	
定性評価	B	B	B	B	
【目標値】 ・講演会の開催回数 1 回	【実績値・参考値】 (実績値) 講演会の開催回数 1 回 (参考値) 講演会の来場者数 159 人				⑤定量評価
					B

中期計画評価	B
--------	---

中期計画記載事項	文化財に関する調査研究成果を定期刊行物や公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、ウェブサイトにおいては、日本語はもとより多言語でのページを実施させる。なお、定期刊行物等の刊行件数及び講演会等の開催回数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由及び今後の見通し	28 年度からの中期計画期間も毎年オープンレクチャーを行う計画であり、初年度である 28 年度も計画どおり実施した。29 年度も同様に「かたちからの道、かたちへの道」の大テーマの下、講演者 2 名、2 日間の形態で、継続して行う予定である。

中期計画の項目	2-(4)-②	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-②-3)	②調査研究成果の発信 文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多角的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを実施させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを実施させる。 3) ウェブサイトの充実 ・東文研総合検索システム ・東京文化財研究所刊行物一覧 ・学術情報リポジトリ
プロジェクト名称	文化財情報基盤の整備・充実	
文化財情報資料部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○二神葉子（文化財情報研究室長）、福永八朗（アソシエイトフェロー）、小山田智寛（研究補佐員）	
【年度実績と成果】		
○情報発信機能の強化		
・ウェブサイトの主要コンテンツである「東文研総合検索システム」をポータルとするウェブデータベースについて、プロジェクト「専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充」と連携、4件を新規に公開、既存ウェブデータベースへデータを追加した。また、横断検索可能なデータベースの範囲の拡大、関連情報の表示機能の追加などの機能改善を実施した。		
・ウェブデータベースから参照可能な刊行物の PDF ファイルを適宜追加し、学術情報リポジトリの充実を図った。また、東京文化財研究所刊行物一覧についても適宜新規及び遡及入力を行い、学術情報レポジトリの PDF ファイルへのリンクを張った。		
・ウェブサイトを適宜更新するとともに SNS での発信を行い、行事案内や毎月の「活動報告」などについて周知を図った。		
○ネットワーク環境の整備・充実		
・27 年度に導入を開始した大容量ストレージシステムに、10 月、ストレージサーバを追加、容量を増強した。当該システムは、研究情報蓄積のほか、ウェブデータベース検索の SQL サーバなど情報発信にも利用される。		
○情報セキュリティの強化		
・ウェブサーバなどのネットワーク機器及びソフトウェアに対し保守・監視を行い、国立文化財機構内他施設の担当者と情報交換しつつセキュリティ水準の維持・向上に努めた。		
・29 年 3 月に既存の無線 LAN アクセスポイントに個人認証システムを導入、セキュリティの強化を図った。		
・情報発信及び情報取得に際しての当所職員の情報セキュリティへの意識向上を目的に、3 回の研修を開催した（情報セキュリティ研修：第 1 回「東京文化財研究所のネットワークセキュリティの現状」9 月 6 日、第 2 回「マルウェアについて」11 月 1 日、第 3 回「迷惑メール対策～あなたはいつも狙われている～」12 月 22 日 いずれも講師：福永八朗）。		
○その他		
・国による文化財目録（インベントリ）に関する国外の事例調査を実施した。		
・ウェブデータベースの構築及びその効果に関する内容を中心とした調査研究成果を、論文や学会等で発表した。		

年度計画評価		A			
【評定理由】 下記各観点から評価を行った。①適時性においては、データベースのウェブサイトでの新規公開、データ追加は我が国の文化財に対する国内外の関心にこたえるもので、時宜に適っている。②独創性においては、公開データベースは独自に開発したもので独創性が高いといえる。③発展性においては、大容量ストレージシステムは複数のストレージサーバを一体的に扱うことが可能で、今後も容量の増加に対応できるものとした。また、データベースは横断検索が可能で、画像、テキストいずれをも扱うことが可能で、今後のデータベースの多様化にも対応するものとなった。④効率性においては、システムへの理解を深める所内向け研修など、とても効率よく活動を所内外に伝達できた。⑤継続性においては、ウェブサイト更新による情報発信、セキュリティ水準向上への対応も継続的に行った。よって、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。					
観 点	①適時性	②独創性	③発展性	④効率性	⑤継続性
定性評価	B	A	A	A	B
【目標値】	【実績値・参考値】 ・（参考値）ウェブサイトへのアクセス数（訪問者数）2,567,780 件、学術情報リポジトリ等によるウェブサイトにおける論文等の公開件数 1,510 件、論文等件数 2 件（①）、学会等発表数 3 件（②）、報告書等の刊行数 1 件				⑥定量評価
					—
①「東京文化財研究所の文化財データベース—刊行物アーカイブを中心とした、アーカイブ・データベースの目的、要件およびその実現の方法について」福永八朗、6月1日 ②「尾高鮮之助調査撮影記録のデータベース化とその活用事例」二神葉子ほか、6月25日、文化財保存修復学会					

中期計画評価	B	
中期計画記載事項	文化財に関連する資料の収集・整理・保管を行うとともに、調査研究成果を公開し、国内外の諸機関との連携を強化することにより、広く社会に還元する。	
評定理由及び今後の見通し	上記の中期計画の記載事項に沿って、ウェブデータベースの機能改善や、情報発信機能の向上につながるストレージシステムの強化など、順調に取組を進めることができた。29年度以降も、運営費交付金や外部資金による他プロジェクトと連携し、効率的に調査研究を実施する。また、情報システムセキュリティの確保に留意しつつ、調査研究及びウェブを活用した成果公開のための情報基盤の整備を行うとともに、国内外での事例調査を実施し、ウェブにより発信する文化財情報データベースをさらに拡充する。	

中期計画の項目	2-(4)-③	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-③-1)	③展示公開施設の充実 平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。1)特別展・企画展(平城宮跡資料館)・企画展「夏の子ども展示(仮称)」(7/9～9/22)・特別展「地下の正倉院展」(10/15～11/27)・ミニ展示「発掘速報展 平城 2016」(29/1/24～4/2)(飛鳥資料館)特別展「文化財を撮る一写真が遺す歴史」(4/26～7/3)・企画展「第6回写真コンテスト「飛鳥の石」作品展」(7/26～9/4)・特別展「小塔の世界(仮称)」(10/7～12/4)・企画展「飛鳥の考古学 2016」(29/1/24～4/2)
プロジェクト名称	平城宮跡資料館・飛鳥資料館・藤原宮跡資料室における展示公開	
企画調整部	【プロジェクトスタッフ(責任者に○)】○加藤真二(展示企画室長)、三輪仁美(展示企画室アソシエイトフェロー)、田中恵美(展示企画室アソシエイトフェロー)ほか5名	
【年度実績と成果】		
●平城宮跡資料館 ・夏期企画展「ナント!おいしい!?平城京!!」実施(7月23日～8月31日) ・秋期特別展「地下の正倉院展 式部省木簡の世界―役人の勤務評価と昇進―」実施(10月15日～11月27日) ・冬期企画展「発掘速報展平城 2016」実施(29年2月4日～3月31日) ・常設展展示物・施設のメンテナンス。常設展展示壁面ケース LED 化工事対応。 ・ボランティアガイド・外部質問、取材、案内対応(4件/週) ・展示物等の貸借業務(13件) ●飛鳥資料館 ・春期特別展「文化財を撮る一写真が遺す歴史」(4月26日～7月3日)を開催。 5月28日講演会「飛鳥の文化財を撮る眼」、6月24日イベントを開催。 ・夏期企画展「第7回飛鳥資料館写真コンテスト「飛鳥の石」」(7月26日～9月4日)を開催。 ・飛鳥光の回廊(8月27、28日)に参加。 ・秋期特別展「祈りをこめた小塔」(10月7日～12月4日)を開催。 ・冬期企画展「飛鳥の考古学 2016 飛鳥むかしむかし 早川和子原画展」(29年1月24日～3月20日)を開催 ・より分かりやすく展示を一部リニューアルした ●藤原宮跡資料室 常設展示に加え、藤原宮大極殿院出土遺物を速報展示		



地下の正倉院展
式部省木簡の世界
～役人の勤務評価と昇進～
2016年10月15日(土)～11月27日(日)

平城宮跡資料館秋期特別展「地下の正倉院展」ポスター



飛鳥むかしむかし
早川和子原画展
2017年1月24日(土)～3月20日(日)

飛鳥資料館冬季企画展「早川和子原画展」ポスター



平城宮跡資料館秋期特別展「地下の正倉院展」ポスター



飛鳥資料館冬季企画展「早川和子原画展」ポスター

年度計画評価	A				
【評定理由】					
下記各観点から評価を行った。①適時性においては、「破斯清道」木簡、薬師寺東塔の年輪年代学による造営年代など重要な研究成果発表にあわせて展示を実施できた。また、飛鳥資料館の百万塔を中心の一つに据えた小塔の展示は27年度購入した文化財を活用し時宜を得ていた。早川氏原画展は奈文研が多数執筆した連載記事の書籍化にあわせて挿絵イラスト原画を展示したもので、最適なタイミングといえる。②独創性においては、夏期企画展では研究所の研究成果を子供向けにわかりやすく展示したところ、年長者からも大変好評であった。また秋期特別展では、木簡の実資料や削りくずのプレパレート標本多数をわかりやすく・見やすく展示できるようケース等に工夫を凝らし、他館では行われていない展示を行うことができた。また、飛鳥資料館の文化財写真をテーマにした展示は写真室を有する当研究所ならではの展示である。③発展性においては、プレパレート標本や出土種子資料の有効な展示方法を確立することができた。また、いずれの展示も現在、国交省が進めている平城宮跡展示館での展示に生かすとともに、同館開館後の平城宮跡資料館の展示の改変を考えるうえで重要な手がかりとなる。④継続性においては、秋期特別展「地下の正倉院展」は10年間継続しており、木簡ファンの掘り起こしに成功している。また、木簡実資料の展示ルールを確定したとともに、新たな展示方法の模索が続けている。冬期企画展の発掘速報展も2001年度以来継続しており、発掘調査の成果を中心とした研究所の研究成果をいち早く公開する役割を果たしている。⑤定量的評価の観点について、平城宮跡資料館においては特別展・企画展を年間4件開催することができ、目標の120%以上の件数を実施出来た。飛鳥資料館においては目標通り達成した。いずれにおいても、目標以上の実績を上げており、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。					
観点	① 適時性	② 独創性	③ 発展性	④継続性	
定性評価	A	A	A	A	
【目標値】	【実績値・参考値】				⑤定量評価
(1) 平城宮跡資料館特別展・企画展開催件数 3件	(実績値) (1) 平城宮跡資料館特別展・企画展開催件数 4件				(1) A (2) B
(2) 飛鳥資料館特別展・企画展等開催件数 4件	(参考値) 平城宮跡資料館 入館者数 102,053名 開館日数 310日 飛鳥資料館 入館者数 35,970名 開館日数 307日 藤原宮跡資料室 入館者数 8,378名 開館日数 359日 図録等刊行実績：リーフレット7件 (①②③ほか)				
①『ナント！おいしい！？平城京！！』(A4版フルカラー両面印刷三つ折り 7月23日発行)					
②奈良文化財研究所監修『平城京のごみ図鑑』編集・執筆（河出書房新社出版、A5版127頁、11月30日発行）					
③飛鳥資料館図録第64冊『文化財を撮る一写真が遺す歴史』4月26日刊行					

中期計画評価 0	A
中期計画記載事項	平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館については、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。なお、公開施設における特別展・企画展の開催件数については、前中期目標の期間の実績以上を目指す。
評定理由及び今後の見通し	新たな展示の手法やパネル等の表現について模索しつつ、新たな参観者層の掘り起こしを図ることができた。今後、平城宮跡展示館の開館とその後の平城宮跡資料館の展示内容の改変を見据えながら、研究成果の公開施設としての役割を強化する観点から展示等を充実させ、来館者の理解を促進するという平城宮跡資料館の計画を着実に実施していきたい。28年度はこの上なく中期計画の順調なスタートが切れたことから、Aと評価した。

中期計画の項目	2-(4)-③	文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用
年度計画の項目	2-(4)-③-2)	③展示公開施設の充実 2) 平城宮跡解説ボランティア研修として、平城宮跡に関する講義研修、来館者対応・接遇に関する臨地研修、特別展等開催に伴う解説研修を行う。
プロジェクト名称	平城宮跡解説ボランティアに対する研修等の実施	
研究支援推進部	【プロジェクトスタッフ（責任者に○）】 ○津田保行（連携推進課長）、梶原孝次（連携推進課課長補佐）、岩井靖子（連携推進課事務補佐員）	

【年度実績と成果】

- ・平城宮跡解説ボランティアを組織・運営して、来訪者に対して、第一次大極殿等の文化庁施設、平城宮跡資料館の定点解説のほか、予約及び当日受付した来訪者を対象に「ツアーガイド」として宮跡内各施設に同行し解説を行い、平城宮跡の理解を広げることに貢献した。また、公益財団法人アジア福祉教育財団が研修の一環として実施した海外福祉関係者の施設見学で英語による解説を行った。
- ・国営平城宮跡歴史公園への進展も見据えて、解説ボランティア制度の改善のため、所内で懇談会を立ち上げ、研修の充実等の検討を行っている。
- ・ボランティアに対して、以下のとおり各種研修を実施した。

研修実績

6月18日	第118回公開講演会受講による研修実施
10月14日/17日	地下の正倉院展第1期解説研修実施
11月1日	地下の正倉院展第2期解説研修実施
11月5日	第119回公開講演会受講による研修実施
29年2月3日/6日	発掘速報展平城2016 解説研修実施



公開講演会受講による講義研修の様様

年度計画評価	B
--------	---

【評定理由】

下記観点から評価した。①適時性において、平城宮跡解説ボランティア事業では、来訪者の様々な知識需要・必要性に対し、その場にて十分な対応ができた。②発展性においては、多種多様な層の来訪者へ解説ができ、特に海外からの来訪者からの反響は大きかった。③効率性においては、解説ガイド申込の際に来訪者へのアドバイスを補足することで、効率よく解説を実施できた。④継続性においては、年間を通して、平城宮跡解説ボランティア事業はとぎれず、継続した解説者の配置を行うことができた。以上、順調かつ効率的に事業が推移していると判断した。

観点	① 適時性	② 発展性	③ 効率性	④ 継続性	
定性評価	B	B	B	B	

【目標値】	【実績値・参考値】 (参考値)	定量評価
	・ボランティア登録数 124 人 ・ボランティア解説を受けた来場者延べ人数：70,332 人 ・解説活動日数：309 日	—

中期計画評価	B
--------	---

中期計画記載事項	宮跡等への来訪者に文化財及び文化財研究所の研究成果等に関する理解を深めてもらうため、解説ボランティアを育成する。
評定理由及び今後の見通し	28年度はボランティアによる定点解説やツアーガイドなどを実施し、来訪者に対して平城宮跡の理解を広げることに貢献した。また、解説研修を始めとする各種研修を実施し、ボランティアの育成を行った。今後は、28年度に組織した懇談会において、平城宮跡の変化等に対応したより効果的な研修等の在り方などの検討を進め、その検討結果を研修等に活かしていく予定である。